

# 鹿児島県の甘でん 今年の予想

鹿児島県澱粉協同組合連合会

専務理事 榎木 輝 男

自由化の問題をめぐる、米、乳製品、でん粉等の農業問題は、先のガット・ウルグアイラウンドの貿易交渉委員会（TNC）が7月26日で閉幕し、問題は全て先送りの形になった。

10月8日から再び貿易交渉委員会は再開され、各国は、農業、繊維、関税等についての最終案を提出し、ドンゲル事務局長が11月25日まで最終合意案をまとめる事で作業が進められていると聞いており、いろいろと問題はあるが、いよいよ自由化を廻ってひとつの山場を迎えるのではないかと予想される。

こうした動きの中で、原料用甘しょの最大の産地である鹿児島のでん粉工場という立場から見た産地の状況をまとめてみました。

## ■今年の甘しょの作付けと生産予想

今年の甘しょの作付けは、当初天候にも恵まれ順調な作付けが行われた。6月中旬以降は異常な高温、日照りがつづき、遅植えの甘しょは生育が止まり、一部開花なども見られた。

県内の作付けは、面積で、ほぼ前年並みかやや下廻る程度で、大きな面積の変化はみられない。地域的には、曾於、肝属方面で一部芝生、野菜に転換がみられたが、熊毛、出水、日置地域では若干の作付増加がみられる。

生産量を予想するのは、現時点では非常に難しい事ではあるが、現在までの気温、日照

量、降水量等や中間のいもの豊凶試験の掘取状況から考えて、前年度の55万2千t程度は確保されると見込まれ、場合によっては前年を上廻る生産量となるのではないかと予想されるが、天候次第である。

近年、このように甘しょの生産が非常に安定化しつつある。

それは、まず、甘しょの新品種の普及が急速に伸びた事だろう。でん粉原料用としてのコガネセンガン、農林2号が主体であったものが、新品種のシロユタカ、シロサツマ等に大きく品種更新がなされて、栽培面積の大半をカバーするようになってきた。第2点は、マルチ栽培の普及によって、いもの活着が早く、早期の茎葉の繁茂が良く10アール当りの収量が高くなってきている。肝属、曾於、出水地域のマルチ栽培の普及率は、31.5%となっている。ちなみに青果用甘しょは47%である。第3点は、植え付け時期の早進化である。従来は6月中心の植え付けが多かったが、近年は5月中には大方の地域が植え付けを終るようになった。

6月に入ってから作付けされるのは、野菜のあと作か、牧草の刈取りあとぐらいである。これは、一つには甘しょの種芋が低温貯蔵によって腐敗が少く、100%の種芋が確保され、生産計画に見合った床伏せが可能となり、採苗率が非常に上った事が原因と思われる。

又、甘しょの育苗が、従来、個人育苗主体

であったのが、農協の共同育苗、或は甘しょ苗専門育苗農家の出現によって、農家が苗の契約生産によって適期に自分の農作業に合せて、いも苗を供給できるようになった。こうした事が、甘しょの生産の安定が図られるようになった要因と思われる。

かつて、植え付けの遅れ、細苗、早ばつ被害と生産性の向上を阻んできた悪条件が大きく転換し、農家もでん粉工場も、近年は8月を過ぎるとその年の甘しょの作況により、生産の予想が出来るようになった。

#### ■甘しょの需要の動向

本県の甘しょは、でん粉原料用向けが、生産量の65%~70%を占めており、例年大きな変化はみられていない。

近年は市場販売の青果用甘しょ、加工食品用としての需要が徐々に伸びているが、飛躍的な需要の伸びは認められない。

一方、焼酎原料用として7~8%を占めていた甘しょが、昭和61年頃から麦焼酎に押されて、需要が落ちてきており、かつて7万t近い需要量のあった甘しょが、平成元年では4万7千tまで落ち込んでおり、でん粉用原料は、むしろ近年安定化して来ている。

#### ■でん粉工場の動向とでん粉の生産

鹿兒島県の甘しょでん粉の生産目標は、12万2千200tとなっている。

昭和62年度から、各でん粉工場は、過去の生産実績を基にして、工場別の自主計画生産目標が設定されているので、その目標に向けて、農家との契約栽培が行われている。

鹿兒島県内のでん粉工場は、現在60工場が操業しており、そのうち農協系30工場、工組系30工場となっている。

でん粉工場の規模は、年間原料処理量、4

千t以下が17工場(28%)、4~6千t工場が13工場(22%)、6~8千t工場が13工場(22%)、8千~1万t工場が7工場(12%)、1万t以上が10工場(16%)で平均規模は、6千t余りとなっている。

年間処理量、6千t以下が全体の50%占めており、工場規模は小さい。

でん粉工場の建設年次を調べてみると、昭和11年から40年度までに建設した工場が全体の80%を占めており、昭和51年以降に建設した工場はわずかに2工場にすぎない。特に工組系に、古い年次のでん粉工場が多くみられる。

原料用甘しょの集荷は、でん粉工場の集荷計画に従って、それぞれの工場で集荷されるが、包装は、風体共に1俵40kg程度で取引されている。集荷は、業者のトラックによる搬入が大半であるが、一部は、農家から直接の持込みもある。

近年は、生産者の高齢化が進み、1俵40kgでは重くて取り扱いが不便であるので、20kg入りの包装で取り扱う農協も増えつつある。

でん粉工場の原料用いもの取引は、農家からの直接購入、又は農協を通じての委託加工方式である。

でん粉工場の集荷の範囲を調べてみると、標準的な距離は、農協系で7.2km、工組系工場で11kmとなっており、工組系工場のほうが、集荷範囲が大きい。最も遠い集荷距離は、農協系で20km、工組系では32kmとなっているが、遠距離輸送は、大半が持込販売である。

工場のでん粉歩留りの推移をみると、近年新品種のシロユタカ、シロサツマの普及率の高い地域程、でん粉歩留りの向上が認めら

れ、高でん粉品種の育成の意義が極めて高くなってきている。昭和63年度の各工場間の歩留りは、もっとも低い工場で26.9%、高いのは32.1%と大きな差がみられており、平準的な歩留り向上対策が望まれる。

でん粉製造上の問題は、コストを如何に安くするかが、今日の大きな課題になっている。

甘しょでん粉工場の場合、なかなか決め手になる低減の目安がないのが現状である。

でん粉製造の原価の中で、ウェイトの高いのは、甘しょの原材料費で、次いで製造経費である。

製造経費の中では、電力代、次に、償却費で、この2費目で、製造経費の大半を占めており、節約するにも工場では、なかなか難しい問題だ。

工場規模による製造経費は、農協系工場の規模の大きさによって、若干の相関がみられるが、工組系工場では、むしろ、小規模工場の経費が少い工場が多い。

コスト低減対策としては、更に細かな製造経費の内容検討が必要であり、自由化とも、併せてきびしい問題を内蔵している。

次に公害の処理は、でん粉工場の大きな、経費の分担になっており、排水処理の技術の確立が極めて重要である。

鹿児島のでん粉工場では、長期表面曝気方式を主体にして、国、県の補助事業によって、排水処理施設の整備が行われて来たが、近年は、中温のメタン菌を活用した、嫌気醗酵を併用して処理するでん粉工場も、増加しつつある。排水処理が極めてうまくいっている工場と、メタン菌の培養がうまく行っていない工場があり、嫌気処理技術の確立が、急

務となっている。

この技術処理が成功した処では、排水処理の経費が、半分以上に節約され、効率的な成果が得られている。

#### ■今後の産地の対応

鹿児島においては、原料用甘しょの適正な生産と、でん粉工場の合理的な操業を行うため、年度始めに、原料用甘しょ、適正生産対策要領、及び原料用甘しょ生産加工対策指標を作成し、生産農家への呼びかけ、行政機関等の協力を得て、原料用甘しょの生産でん粉工場の経営の安定、生産性の向上に努めている。

平成2年度は次のような要領を定めて、その目標達成に努力している。

#### \*平成2年度原料用甘しょ適正生産対策推進要領

1. 原料用甘しょの生産計画と実績
2. 原料用甘しょの生産対応（平成2年）
  - (1)自主計画生産目標の維持（県目標、12万2千2百t）
  - (2)各でん粉工場、計画でん粉生産量の維持確保
  - (3)生産グループ、単位農協、生産農家との適正契約栽培推進（作付面積、反収、契約生産量）
  - (4)豊凶による契約生産量の適正な受入（個別工場処理）
  - (5)契約栽培推進について関係機関の協力（農家、農協、市町、地区別、会議開催）
  - (6)適正生産のための優良品種、反収の増加等による甘しょ作改善の関係機関の協力指導（市町、農協、普及所、農林等）

#### \*原料用甘しょ生産加工対策指標(平成2年)

1. ねらい

原料用甘しょの生産安定と優良品種の普及を図り、契約栽培によるでん粉工場の経営安定と農家の所得向上に努める。

2. 生産指標（10アール，生産量，4 t）

(1)優良品種の普及（シロユタカ，シロサツマ，コガネセンガン等）

(2)健苗育成（ハウス育苗，共同育苗）

(3)適期植付（早植粗植）

(4)マルチ栽培の導入（早植え増収）

(5)地力増進（深耕，堆肥増施）

(6)施肥の合理化（三要素の適正）

(7)病虫害の防除（早期防除）

3. 工場への計画出荷

(1)適期収穫

(2)工場の計画操業，集荷計画の徹底

(3)新鮮な甘諸出荷（掘取直後搬入）

4. でん粉工場

(1)良質でん粉生産

(2)コストの低減

(3)歩留り向上対策

5. 農家の所得目標

10アール，100俵，10万円以上。

原料用甘しょの安定生産により，でん粉工場の経営安定をすすめ，より良質のでん粉生産と，コスト低減に努め，きびしく迫られている，自由化をあくまで阻止し，南九州の基幹作物である甘しょを守ると共に，国内産甘しょでん粉の生き残りにかけてゆきたいと努力している。

いも・つれづれ草

●ジャガイモから生まれたファッション

19世紀半ば，クリミア戦争が始まった。ナヒーモフ提督の指揮するロシア黒海艦隊に負けたトルコ艦隊を支援するため，フランス，イギリスなどの約6万の大軍が1854年9月クリミアに上陸し，長期戦が開始された。この寒い時期の戦いで，ジャガイモを入れて運んだ麻袋と戦傷者が多数でたのは当然の話。

そこで，イギリスの指令官ラグラン伯爵は，ジャガイモ袋の2隅を切り落とし，傷病兵が楽に着れる服をつくらせた。まさに一石二鳥の解決策である。これが，ゆったりした着やすいラグラン袖誕生の話である。

●うどんの花色は？

そば畑の花を遠くから眺めると，ジャガイモのそれによく似て，じゅうたんを敷いているように見える。

しかし，見る時刻では差があり，ジャガイモは午前がよく，蜂などの来訪を待つそばでは，それほど店じまいが早くない。

ある大臣が旅行中に，夕闇のなかに，雪でも降ったように咲き揃ったそば畑を見て，『あれは何の花か』と質問した。お側から，『そばの花です』と返事したところ，『なるほど，そばの花は白いのか。美しいものだろう』と感心し，続けて，『では，うどんの花はどんな色をしているのか』と尋ねた。

そばの花の色は普通は白で，開花までの気温などにより，淡紅色を呈するにとどまっている。しかし，ジャガイモでは，白の外，薄赤紫，紫，青などの外，南米ペルーには，ソラム・ペンネリーという黄色の花をつける野生種もある。

●ポテト・ジョーク

3人の子供が放課後教員室から出てきたので聞いてみた。

「君は何で先生に叱られたのだ」

A「畑でジャガイモを蹴飛ばしたんだ」

B「僕はジャガイモを踏んだんだ」

「そんなことで，こんな遅くまで叱られていたのかい，そして君は」

C「僕がそのジャガイモなんです」（浅間和夫）